

## 「目は体の灯」

2023年07月12日

「灯をともして、それを穴蔵や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。あなたの目は体の灯である。目が澄んでいれば、あなたの全身も明るい、目が悪ければ、体も暗い。だから、自分の中にある光が暗くならないように気をつけなさい。あなたの全身が明るく、少しも暗い部分がなければ、ちょうど灯が輝いてあなたを照らすときのように、全体が輝くだろう。」（ルカ11：33～36）

主イエスは、「灯をともして、それを穴蔵や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く」と言われた。イエスの時代、夜は真っ暗であったであろう。その中で、灯がともされると、回りが明るく照らされ、入って来た人はホッとしたであろう。主イエスは、その灯を穴蔵や升の下に置く者はなく、燭台の上に置いて、回りを明るくするとされた。当然のことである。この譬えから、目に転嫁した内面的な話に進めている。「あなたの目が体の灯である。目が澄んでいれば、あなたの全身も明るい、目が悪ければ、体も暗い。だから、自分の中にある光が暗くならないように気をつけなさい。」目は体の灯である。だから、目が澄んでいれば、全身が明るくなり、目が悪ければ、体は暗くなる。この譬えは、視力障がい者には、受け入れ難いのではないか。目の悪い人は暗い体を持つことになることと聞こえるからである。主イエスは、「人々はしるしを欲しがると語られた。主イエスのしるしを受け入れる心が、澄んだ目、即ち、純真な心であって、その人は、自分自身と世界を神の恵みで満ちた明るいものとして受け止めることができる。そのような意図で話されたのではないか。「あなたの全身が明るく、少しも暗い部分がなければ、ちょうど灯が輝いてあなたを照らすときのように、全体が輝くだろう」と続けられた。自分の中にある光、即ち、主イエスに表わされたしるしを受け止められるような純真な心を持つならば、暗く否定的に見ることなく、闇の中でも灯が輝いて、回りを照らすように、あなたの生は輝くものとなる。主イエスは、灯を燭台の上に置く譬えから、神の恵みを知って、明るく輝く人生を生きなさいと諭されたのである。

ヨハネ福音書は、光と闇に関し、格調高く神学的に書いている。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった（ヨハネ1：1～5）。」「言」とは神と共にあったキリストを指す。キリストは神の言であり、キリスト・言によって万物は創造され、言には命があり、人を照らす光として輝き、闇は光に勝つことはない。ヨハネ福音書は、キリストが光であると力説する。「イエスは再び言われた。『私は世の光である。私に従う者は闇の中を歩まず、命の光を持つ（ヨハネ8：12）。』」光である主イエスに従う者は、命の光を持つ。「イエスは言われた『光は、今しばらく、あなたがたの間にある。闇に捕らえられないように、光のあるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光あるうちに、光を信じなさい（ヨハネ12：35～36）。』」主イエスは光である。この光を信じて光の子となり、光に導かれて歩みなさい。ルカ福音書では、主イエスの言葉と業に澄んだ目で福音を見る者は、灯が明るく照らすように、輝いて生きると勧めている。